

令和6年度 学力向上プラン

学校名 中央区立豊海小 学校

学校の教育目標

人権尊重の精神に基づき、児童一人一人のよさや可能性を十分に伸ばすとともに、心豊かでたくましく生きる子供の育成を目指し、区民の信頼と期待に応える調和のとれた教育を推進する。

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・一人一人の児童の個性や能力を生かし、基礎的・基本的な学力を身に付けさせる。
- ・確かな学力の向上を目指し、一人一人の児童のもつ資質や能力を把握し、個に応じた指導を工夫し、基礎的・基本的な内容を習得させ、それらを活用して探究できる魅力ある授業を実施する。

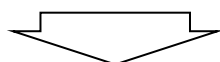
令和6年度「学習力サポートテスト」や令和6年度学力向上プランの検証結果、学校評価の結果等によって明らかになった課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国 語	「令和6年度学習力サポートテスト」において、全国平均と比べると、4・5年生は、すべての項目で平均を上回っている。6年生は、8項目中6項目が全国平均を上回っている。しかし、区平均と比べると、「説明文の内容を読み取る」「言葉の学習」の領域で下回っている学年が多く、実際に話し合う活動の経験不足や、読書量の少なさが推測される。また、漢字の読み書きについても点数が低下しており、基本的な語彙力に課題がある。	反復練習に粘り強く取り組むことに難しさを感じる児童が多く、文章を書く機会が少ないことや学習した漢字を使えていない児童も多い。連体修飾語と連用修飾語の理解が乏しい。構成のパターンを理解できていない。また、文章の中で一つ一つの言葉の意味や役割も理解できていない。
算数・数学	「令和6年度学習力サポートテスト」において、全国平均と比べると、4・5年生は、すべての項目で平均を上回っている。6年生は、10項目中9項目が全国平均を上回っている。しかし、区平均から見ると、どの学年も下回る領域が多く、基礎的な四則計算の定着に課題が見られる。計算の過程についての理解や、定着について、該当学年だけの課題ではなく、低学年での習熟不足や、系統的な学習指導に課題がある。	低学年で学ぶ四則計算の計算過程や計算の仕方について正しく理解し、定着させていく時間が少ないと考えられる。また、既習の知識・技能などを関連付ける力が十分でなく、習熟を図る時間も少ないため、個人差が大きく、小さい頃から教科に苦手意識をもち、難しい問題と判断した場合手を付けずあきらめてしまう児童も少なくない。
社 会	「令和6年度学習力サポートテスト」において、4年生は、全国平均と比べると、8項目中5項目で平均を上回っている。5年生は、6項目中5項目が全国平均を上回っている。6年生は、9項目中6項目が全国平均を上回っている。区平均から見ると、各領域の基礎的な問題で正答率が下回っており、特に、市の様子や自然災害からくらしを守る、国土や地域の様子、産業について課題がある。	学習したことの復習や学習した内容を活用する場が不十分である。また、各種資料の読み取り方など基本的な技能が定着していないために資料を活用する力が低い。

理 科	「令和6年度学習力サポートテスト」において、4年生と5年生はほとんどの項目で全国平均を上回っている。6年生は多くの項目で全国平均を下回っている。区平均と比べると、4年生は、身近な自然や生物の生態についての理解に課題がある。5年生は、「物の体積と力」「物の体積と温度」「物のあたため方」が区の平均点より大きく下回っている。6年生は、「流れる水のはたらき」「ふりこのきまり」「物のとけ方」の理解に課題がある。事物・現象を既習内容や生活経験などに関連付けたり意味付けさせたりする確かな理解とする力が乏しい。	事物・現象について観察や実験を行う環境や体験する機会が少ない。また、他の教科に比べ、知識の定着を図る時間が少ないため、定着しきれていない。また、学習を通して身に付けた知識を自然や日常生活に当てはめて考えたり、科学的な言葉や概念を活用して説明したりする経験が十分でない。
英 語	「令和6年度学習力サポートテスト」において、9項目中7項目で全国平均を上回っている。しかし、区平均と比べると、「アルファベットの読み（聞く）」「単語の読み」「英文の完成」「英作文」が平均を下回っている。身近な語彙の意味理解の定着、自分から自信をもってコミュニケーションを取れるようにするための反復練習が十分でないことが課題である。	既習の単語や表現を活用する状況や場面設定を最終ゴールとして児童にイメージさせることに時間の確保が足りない。また、話すことに慣れるまでの十分な練習時間が不足している。
体育・保健体育	「令和6年度東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査」において、「長座体前屈」の平均値が、全国の平均を下回っている学年が多くあった。体の柔軟性の向上が課題である。	地域的特性から、運動量の確保が難しい。また、運動する機会の中でも、柔軟性に着目させる場面が少なかった。

学力向上に向けた視点		年度末までの目標及び指標
①各教科	国語	「令和6年度学習力サポートテスト」において、実施学年で「説明文の内容を読み取る」「言葉の学習」の領域で区の平均点を上回るようにする。
	算数・数学	「令和6年度学習力サポートテスト」において、実施学年で「数と計算」「図形」項目で区の平均点を上回るようにする。
	社会	「令和6年度学習力サポートテスト」において、実施学年で市の様子や自然災害からくらしを守る、国土や地域の様子、産業区の平均点を上回るようにする。
	理科	「令和6年度学習力サポートテスト」において、実施学年で身近な自然や生物の生態についてや「物のあたため方」「ふりこのきまり」領域の平均点を上回るようにする。
	英語	「令和6年度学習力サポートテスト」において、実施学年で「アルファベットの読み（聞く）」「単語の読み」「英文の完成」「英作文」の項目で平均点を上回るようにする。
	体育・保健体育	「令和6年度東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣調査」において、「長座体前屈」の項目で、どの学年でもTスコアが前年度を上回るようにする。
②授業改善		タブレット端末を効果的に活用することで児童の興味・関心・意欲を高めたり、学習計画や授業のめあてを児童が明確に意識したりするなど、見通しをもって授業に取り組ませる。また、児童自身が自己の課題に気づき、課題解決に向かう授業を実践することで、学校評価の「授業の内容が分かる」の項目で、児童の回答が80%以上になるのを目指す。

③家庭との連携	タブレット端末を活用した個人の学習進度に合わせたドリル学習、児童への問題の配信、学習履歴の情報共有など、家庭と連携して個に応じた指導を充実させ基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させる。
④体力向上	マイスクールスポーツのなわとびについて、学級目標を設定して練習に取り組み、目標を達成した学級が全体の50%以上となることを目標とする。本校の課題である柔軟性の向上を図り、各学年が令和6年度の結果を上回ることを目標とする。



【目標達成のための具体的な取組内容】

① 各教科	
国語	朝学習をはじめとして、ドリル学習を学習の中に計画的に帯設定し、言語の既習事項の習熟を図るために音読や作文する活動を積極的に取り入れていく。読書習慣が身に付くように、継続的に読書の時間を確保し、読解力・理解力を高めていく。話し合い活動や発表の活動を積極的に取り入れ、相手意識や目的意識を明確にするためのめあてを設定し、児童が主体的に学習に取り組むようにする。説明文の構成パターンを理解させるために、尾括型、双括型、頭括型など、大切なことがどこに書かれていて、なぜ事例が挙げられているのかといった構成上の筆者の意図を考えさせるための指導をする。話し方の話型を学年に合わせて作成し提示する。正しい漢字の使い方や、文章を書く中ですすんで漢字を活用できているかを確認する。
算数・数学	朝学習をはじめとして、ドリル学習や100マス計算などの基礎力を高める学習を計画的に設定し、四則計算力を高める。また、各単元の指導の前に行うレディネステストを活用し、本単元の学習に必要な基礎基本の定着の度合いを確認した上で指導計画を立て、授業を展開していく。本校の補習教室である「豊海塾」では算数に特化して行い、基礎基本の定着を図っていく。授業では既習を生かして自分の考えをまとめたり説明したりする活動を毎時間設定する。図形の学習では、具体物やデジタル教材を使うことで、空間認知力を高める。
社会	それぞれの事象について課題意識をもったり、地域素材を学習に取り入れて自分事として捉えたりする授業を展開することで、問題と調べて分かったことを結び付けて理解したり考えたりできるようにする。視覚化した映像資料を活用し、学習内容と身近な事象を関連させて捉えられるような授業を展開し、内容の補足や定着を図っていく。
理科	事物・現象について、観察や実験を行う環境を整え、方法や設定を試行錯誤したり、自然や日常生活において当てはまるものや実体験をもとに考察したりする授業展開にする。また、単元の初めと終わりには、必要な知識の確認を行ったり、ドリル学習を計画的に設定したりする。視覚化した映像資料を活用し、授業内容の補足や定着を図っていく。実験の予想を立てる際には、身近な事象との関連を理由付けとして挙げさせるなど、筋道を立てて物事を考える学習習慣を定着させていく。
英語	単元設定において、必然性のある、学習内容の選定を行い、計画を立てる。聞く活動を重視した授業展開の中で、耳慣れた英語表現を使って話すことに慣れさせていく。練習時間を十分に確保し、交流する場を設け、英語で会話する機会を意図的に増やしていく。

体育・保健体育	柔軟性の向上につながる運動を予備運動に毎時間取り入れる。また、休み時間でも取り組めるような遊びを紹介し、日常化を図る。場所の確保として、体育館や屋上にも教材や場の設定を行い、少しでも体を動かせる環境を整えていく。マイスクールスポーツの時間を確保し、基礎体力の向上に努めていく。学校として体力・運動能力の向上が図れるように系統的な指導計画を意識した指導を行っていく。
---------	--

②授業改善

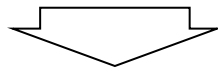
取組Ⅰ	タブレット教材、デジタル教科書や大型提示装置、プレゼンテーション発表ソフト等を活用することで学習意欲を向上させ、学習への理解を深めたり自分の考えを伝えたりすることで児童の学習効果を高めるための授業改善を図る。
取組Ⅱ	管理職による授業観察を行い、個々の教員の課題を明らかにすることで、指導力の向上を目指し、授業改善につなげる。また、学年内での交換授業や教科担任制、OJTによる授業研究の取り組みを継続する。

③家庭との連携

取組Ⅰ	個人面談、保護者会等を活用して、児童の学習状況やそれぞれの課題を伝えたりすることで、保護者と共通理解を図りながら、連携を強化する。
取組Ⅱ	タブレット端末を中心に学校からの情報が全て確認できるようにし、子供の学びの姿や必要な情報が手軽に得られるよう classroom を活用するなどして、家庭と共有できるように取り組む。

④体力向上

取組Ⅰ	長縄に継続的に取り組み、楽しさを味わうとともに、リズム感・調整力・持久力を育てる。活動の振り返りをこまめに行い、動きを客観的に捉えられるようにするとともに、1年間を通して、継続的に取り組めるようする。 長縄記録会を1年間で複数回設定し、めあての達成感を実感させ、定期的に計測したり、目標値を廊下や教室に掲示したりして、継続的な活動への意欲とする。
取組Ⅱ	学校での取組をホームページや学校便り等で紹介し、家庭からの理解と協力を得て、児童の意欲喚起と、継続的な体力向上への活動を図っていく。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点		取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	国語	○週3回の基礎学習の時間を活用して、ドリルパークや漢字・計算ドリルの学習を進めることで、基礎力の定着をはかることができた。	▲学級の状況や学校行事などの諸事情により、学級によって朝の時間を確保できない場合があった。 →学年主任を中心として、各クラスの学級経営（学習規律・生活規律など）を整え、児童の学習に向かう姿勢を整えていく。
	算数	○補習教室「豊海塾」では、個別対応で学習指導ができた。 ○算数の習熟度別指導は、児童の学力や学級状況を踏まえて効果的に行うことができた。	▲豊海塾は、参加者を限定したことで少数の児童のみの指導となった。 →対象児童を限定するのではなく、全員で取り組めるような基礎・基本の内容を検討していく。また、夏季休業中に短期集中で取り組み、基礎基本の定着を図っていく。
	社会	○総合的な学習の時間の学習と関連付けることで、児童が学習内容を身近に感じて学習を進めることができた。	▲効果的な指導用データを校内共有する場が少ない。 →効果的な映像資料は校内で共有したり学年で引継ぎしたりするなど、データのストックを共有していく方法を検討していく。
	理科	○問題、予想、実験、考察、まとめなど、一定の学習方法を統一することで、児童が学習の流れをルーティーン化することができた。	▲ドリルパークは算数や国語が中心となってしまう、理科の比重が軽くなってしまった。 →学年で計画を立て、理科の学習に定期的に取り組めるようにしていく。また、理科講師や理科支援員とも連携を図り、効果的な授業を展開していく。
	英語	○場面がイメージできると、児童が英語を使うイメージがしやすく、発話の頻度が増えてきた。	▲単元の特性によって年間の指導方法を検討する。 →アルファベットの学習は、学年の特性や習熟度を考慮し、単元のみの扱いではなく、通年通して授業の帯時間等を作って学習し、より確実に定着できるようにしていく。
	体育 保健体育	○マイスクールスポーツ（長縄）は児童の団結力を高め、体育への関心や技能を向上させる意欲につながった。	▲苦手意識をもったり意欲が低下したりする児童の対応をしていく。 →上下や左右をまたぐ運動に課題がある児童が多く、体幹を刺激する運動を取り入れるなどして、動きやすく、けがをしにくい体づくりを目指していく。
②授業改善		○ICTを効果的に活用することを研究でも取り扱い、タブレット端末を活用した授業は、児童の主体性を高めた。 （ワード、パワーポイント、オクリンクプラス、調べ学習など） ○学年内での交換授業や教科担任制の導入を少しずつ進めることができた。 ○話し合い活動の場をより多く設けることで、話し合いがスムーズに進めることができた。	▲教員同士が授業を見合う機会を設ける。 →OJT研修の一環で定期的の実施し、授業改善が図れる場を計画的に設定していく。 ▲高学年になるにつれ、学級経営が難しくなっていくため、学習に向かう姿勢を整えていく必要がある。 →教科担任制の確立とOJT研修等で学級経営を学ぶ機会を設ける。
③家庭との連携		○個人面談を年2回実施し、学習面や生活面の課題を保護者に伝え、家庭と連携して児童指導を行うことができた。 ○クラスルームやテトルを活用して配布資料のペーパーレス化を図ったり、対面だけでなく、オンラインで保護者会を実施したりした。	▲学校の方針と保護者の考えを折り合わせする機会を設ける。 →「学校」という場での指導について、保護者会やテトル配信などの様々な場面で情報を発信・共有することで、保護者の理解を得られるように努めていく。

④体力向上	○長縄の取り組みは、児童の主体性を高め、目標達成に向けて努力する姿勢を育てた。 ○異学年交流で見合う、教え合う機会をつくったり、発表する場をつくったりして、意欲向上を図れた。	▲通年実施をし、目標意識の継続を持続させられるようにする。 →3学期末だけではなく、各学期末に記録を図り掲示することで回数の伸びに注目し、意欲向上につなげられるよう努めていく。
-------	---	--